高い価値のある「情報」とはどういうものなのか？

坪田知己（https://www.facebook.com/tomomi.tsubota.1）

　昨夜、「高い価値のある「情報」とはどういうものなのか？」という質問メールが来た。

　私は10年前に「情報無価値説」というものを唱え、学会で発表したことがある。
　これは、情報に限ったことではないのですが、物事の価値というのは、一定に決まるものではないということです。それが「一定に決まる」と思っていることから、様々な錯誤が生まれるのです。

　たとえば、スーパーに１個150円のリンゴが置いてあった。これが「150円の価値がある」ということではありません。この150円は、希望小売価格であって、このリンゴが150円で取引されて、初めて150円の価値があったと確認できるのです。
　ネクタイなどは、最初は1万円。しばらくすると5000円になり、最後はバーゲンで500円で売られる。では、このネクタイは1万円の価値があるのか、5000円なのか、500円なのか・・・というと500円、もしくは売れなければゼロということになります。

　情報について、私は５W1Hで考えています。
　５W1Hとは、「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「なぜ」「どのように」というもので、新聞記事ではこの５W1Hがちゃんと入っていることが要件になっています。
　私が言いたいのは、その情報は「いつ」「どこで」「だれにとって」「何をもって」「なぜ」「どのように」価値を持つのかということです。
　新聞記事は、読者にとって重要なことを大きく、そうでないことは小さくレイアウトして伝えます。
　昔、某社のカナダ駐在記者が、カナダの川が大氾濫して、家畜が数千頭死んだということで、現地の新聞にトップで報道され、その記事を東京に送ってきました。東京の編集局はそれをボツにしました。それより、「東京・北区の住宅街で火事」の方が優先すべき記事だったからです。
　ということで、ニュースは、それが起きた場所、自分にどうかかわるのか・・・で価値が変わります。トルコでデモが頻発しているということは、トルコに旅行を計画している人には大きな価値がありますが、その計画がなければ見過ごしても構わない情報です。

　私は以上のようなことを「関係性による価値」と呼んでいます。

「重要な情報とは何か」といわれれば、「個々人の行動変化を起こす情報」ということです。
　主役は、個人です。明日、福井県に行くというのであれば、福井の天候は重要です。傘を持って行くべきか・・・ということで行動の変化に関係しますから。しかし、盛岡の天気は重要ではありません。
　でも、盛岡に実家があり、そこで竜巻が起こっているというのなら両親の安全にかかわりますから重要な情報になります。

　このように、一つの情報も、その情報に接する人の属性、関心、行動範囲などによって価値が変わってきます。ということで、ほとんどの情報は無価値で、ただ、そうした自分との接点のある情報が重要だということです。
　新聞社は、「わが新聞に載っている記事はすべて重要だ」という言い方をしますが、それは供給側のセールストークであって、それに惑わされることはないのです。

「誰から見ても重要な情報」というのはあります。消費税引き上げは、日本国民全員に影響し、景気を

左右し、財政赤字の縮減に関係するので、関心を持たざるを得ません。でも、こうした情報は、われわれの周囲ではごく少ないのです。
　子育て中のママにとっては「子供が熱を出した」は一大事です。でも他人にとっては重要な情報ではありません。

　もう一つ考えなければならないのは、「情報の階層」です。
　情報は「データ」→「インフォメーション」→「インテリジェンス」→「デシジョン（判断）」の順に下から上へと高度化します。これを頭に入れておかねばなりません。ごっちゃにして議論している例が多いのですが、きちんと区別すべきです。
　「データ」は「素情報」です。「そこにある」というだけの、情報です。
　「東シナ海に航行中の中国の船がある」というのが「データ」です。そういうのはどうということのないものです。
　ところが、「この船に、尖閣諸島の領有権を主張するグループが乗っている」「船は尖閣諸島に向かっている」というのはインフォメーション（意味を持つ情報の塊）ですが、こうなると、重要度が増します。
　「日本は尖閣諸島の領有権を主張し、中国の主張は受け入れられないと言っている」という事前情報があるので、「このことにどう対処すべきか」と考えるのがインテリジェンスの部分です。これは「知恵」と訳します。
　その結果、海上保安庁が警備に当たり、上陸を許さないことにする・・・これが「デシジョン」です。
　これまで、「情報化社会」というのは、「インフォメーション・ソサエティ」という言葉で訳されてきました。しかし、こういう言い方ではインフォメーションがたくさんあればいい・・・つまり情報氾濫を歓迎することになります。
　大事なことは「インテリジェンス・ソサエティ」にしていくことです。必要な情報が、必要な人に適切に届けられ、その判断によって、社会が全体としてスムーズに運営されていくということです。つまり「知恵」というエンジンが適宜適切に動くようにすることが「情報化社会」の目的なのです。
　そういう点では、韓国の旅客船沈没事故では、既定の3倍の過積載になっていたという情報が当局に届けられ、あの船を出港停止にするということが、正しい措置だったのです。

　ということで、冒頭の「高い価値のある情報」を論じでも、空理空論になってしまいます。
　どのような条件の下で（特に誰に対して）重要性を持つか・・・そこを考えるのが非常に重要で、この観点を忘れて情報を論じるのは無意味です。

　一見、複雑なようですが、意外に簡単です。何かの情報に接したときに、「それは誰にとって重要か？」「何にとって重要か？」と考えてみましょう。音楽に興味のない人にとって、音楽の情報は「馬耳東風」でしょう。
　情報の世界では「猫に小判」という状況が頻発します。それが普通なのです。
　大事なことは、自分の未来への行動線に対して、その情報がどう関わってくるかを見定めることです。

　供給側から見れば、「高い価値のある情報」を作るのではなく、その情報が価値を持つ瞬間、場所、対象について適切に投入していくことです。
　これまで、新聞は1日2回、全世界の情報から読者への重要度を勘案して編集して配達してきました。
　私が、「日本経済新聞・電子版」を設計する過程で考えたことは、「速報」と「選別」「機能性」でした。インターネットで24時間いつでも速報できる。これが第1の強みです。第２は、読者個人に関心のある項目を登録してもらうか、過去の閲覧履歴から「この読者の関心度」をフィルターとして、重要度に応じて配信するというもの。これは「マイ・ニュースペーパー」といわれるものです。第3は、web

では文字やアイコンをクリックするとリンクによって関連情報に即座にアクセスできます。これを使って、読者が関連情報を参照することを助けることです。

　もう一つ、会議やコミュニケーションでの「価値の高い情報」とは何か・・・ですが、『星の王子様』という絵本に「大事なものは目に見えない」という一節がありますが、その通りで、多くのコミュニケーションや「会議」で「見落とし」が発生します。
　会議などでは、議長、トップランクの人の言動に引きずられて、若手の述べた素晴らしい意見が無視されたりします。
　「その発言の背景は何か」をしっかり伝える必要があります。
　その前提として、この会議で何が話されたのか、どういう小項目があり、それがどういう関連で議論されたのか・・・をビジュアル化するというのが、最も基本的な作業です。
　日々の堂々巡りの会議から脱して、上手に議論を積み上げ、効率的に結論を得るという「お作法」を徹底する必要があります。それこそが「知的生産性」なのです。

　ということで、3100字ほど書きましたが、これが、今後2－3年でまとめようとしている「関係性の情報学」のエッセンスです。